県民生活審議会
第３回　参画・協働推進部会議事録

Ⅰ　日時　　平成１９年3月２０日（火）　１５：００～１７：００

Ⅱ　場所　　兵庫県公館　第 2 会議室

Ⅲ　出席者　　委員：鳥越会長、小西部会長、山下副部会長、岡田委員、
北野委員、阪井委員、神舎委員代理、野崎委員、速水委員
県　：藤原県民政策部長、木村地域協働局長、藤原参画協働課長、
沖本課長補佐兼参画協働ｼｽﾃﾑ係長

Ⅳ　議事
- 平成 19 年度「参画と協働関連施策の展開方針(施策体系)」(案)について
- 団塊世代等の地域づくり活動等の支援について

Ⅴ　内容

１　開会

（事務局）

ただいまから「県民生活審議会　第３回参画・協働推進部会」を開催いたします。

開会にあたりまして、県民政策部長より一言ご挨拶申し上げます。

（部長）

本日は、年度末のお忙しい時期にお集まりいただき、ありがとうございます。

昨日、県議会が終了いたしましたが、平成 19 年度予算提案説明の中で、知事は「もう一度参画と協働の原点に立ち返って、みんなで夢を共有して取り組む時である」と発言していました。

また、県議会では、団塊世代のエネルギーを地域コミュニティの再生に向けて、どのように上手く活用していくのかという質問が数多く提出されました。

本日は、平成 19 年度の参画と協働関連施策の施策体系についてご説明させていただくとともに、団塊世代の地域づくり活動の支援についてもご意見をいただき、新年度の施策展開に生かしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（事務局）

《出席委員紹介》

《資料確認》

それでは、ここからの進行は部会長にお願いいたします。

２　議事

（部会長）

委員の皆さんのご協力を得ながら、議事を進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

本日の議題は、２つあります。

１つ目は、平成 19 年度「参画と協働関連施策の展開方針(施策体系)」（案）（以下「展

開方針（案）」という）についてです。２つ目は、団塊世代等の地域づくり活動等の支援についてです。この２つの議題は、それぞれ関連していますので、議事進行にあたっては、まとめて議論していただきたいと思います。
　また、参画と協働のさらなる推進に向けて、お気付きの点がございましたら、ご自由にご意見をいただきたいと思います。
　早速ですが、議題１、２について事務局から説明をお願いします。

（事務局）
　まず、資料説明の前にご報告申し上げます。
　今年度の部会においてご審議いただきました、「参画と協働ガイドブック（県民向け）」と「参画と協働による施策実施ガイドブック（職員向け）」については、現在印刷中であり、できあがり次第、お届けいたします。
　委員の皆様には、多大なご協力をいただき厚くお礼申し上げます。
　それでは、資料に基づきご説明いたします。

《展開方針（案）について、資料１、２に基づき説明》

《団塊世代等の地域づくり活動等の支援について、資料３、４に基づき説明》

《審議の参考として、県民生活審議会 これまでの経緯と今後のスケジュールについて、資料５に基づき説明》

（部会長）
　事務局からの説明について、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。
　前回の部会では、県民生活審議会への諮問事項である「地域コミュニティの再生について」につなげる観点から、2007 年問題を「参画と協働」の裾野を拡げるチャンスと捉え、団塊世代等シニア層の知恵や力をいかに地域づくり活動に誘導するかを中心にご意見をいただきました。
　今回は、団塊世代等のシニア層を地域づくり活動に誘導する取り組みだけではなく、雇用・就労等の支援や田舎暮らし支援など、人生のセカンドステージのスタートを支援するという観点から、団塊世代対策関係施策を整理しています。
　また､参画と協働関連施策やボランタリー活動支援施策についても整理していますので、参画と協働を一層推進するという観点からご自由にご意見をいただきたいと思います。
　今回、委員の皆さんには事前に資料を送っていただいていますか。

（事務局）
　今回は、作業の遅れから事前にお届けすることができませんでしたので、見ていただくのは本日が初めてになります。
　資料２の展開方針（案）は、来年度にどのような施策を実施するのかを、事前に県民に見ていただくために、毎年度作成しています。
　内容としては、最初に、各部及び各県民局において、来年度、重点的に取り組む施策・事業の概要を記載しています。それらの施策・事業について、巻末に参画と協働の手法を組み込んだ実施フロー図を掲載し、県民が施策・事業のどの段階で、どのように参画し、

協働できるのかが分かるようにすることで、県民の積極的な参画と協働を促すとともに、参画と協働の手法や具体的な運用が適切かどうかについて、県民の意見を聞きながら取り組めるようにしています。

（部会長）
展開方針（案）については、詳しくご説明いただけませんでしたが、この場でご覧いただき、ご質問、ご意見をいただきたいと思います。
多くの新規施策や拡充施策が掲載されていますが、この中で、県民のイニシアティブによって出てきたものはありますか。そういうものがなければ、県の側で単にこういう施策・事業を増やしたというだけであり、それが本来の参画・協働といえるのか、従来から疑問に思っています。そろそろ県民にある程度イニシアティブを与えてもよいのではないかと思うのですが、そのようなものはあるのでしょうか。

（部長）
通常、新年度の施策・事業については、各部局において施策・事業を推進する中で、現場で県民から聴取した意見等を踏まえ、立案しています。
また、県議会の予算委員会でも議論し、そこで出された意見を踏まえ立案しています。県民の代表である県議会からは、来年度の施策・事業について各会派から要望書をいただき、それらを踏まえ、政務調査会等を開催するなど様々な議論を経て、施策を立案しています。

（部会長）
例えば、「これは各県民局の地域ビジョン委員会から提案されたものです」ということを示していただくとよいと思いますが、どうでしょうか。

（部長）
先ほど申しましたように、多様な意見を踏まえて施策をつくり上げますので、「これがそうですよ」というのは、なかなか明確にはしにくいのではないかと思います。

（事務局）
定年が延長されてきていますので、団塊世代対策は、少し早いのではないかと考えていました。しかし、様々な方からお話を伺うと、そろそろ地域づくり活動を支援する枠組みだけでも作っておく方がよいとの意見でした。そこで、まずは枠組みを作ることについて県内部に提案したところ、団塊世代の学習活動や雇用・就労等の支援についても考えているとのことでしたので、このような体系で整理しています。

（Ａ委員）
部会長が言われたように、様々な新規事業が掲載されていますが、例えば、これまで実施してきた事業の成果が、新規事業にどのようにつながっているのかが県民には分かりにくいと思います。どちらかと言うと、新規事業は、新たに構築されたものと受け取られがちですので、その辺りに気を付けながら、分かりやすく説明するとよいと思います。
また、「地域づくり」という言葉が数多く出てきますが、「地域づくり」とは、どういうことなのかの共通理解はできているのでしょうか。

（事務局）
正直なところ、共通理解できているのかと問われると、少し心許ない部分もありますが、「県民の参画と協働の推進に関する条例」では、かなり広い意味で定義されています。自分たちの地域を住みやすくするために、様々な団体も含めて、すべての県民が行う活動を「地域づくり活動」と定義して使っています。今後も浸透に努めていきたいと思います。

（Ａ委員）
例えば、団塊世代対策関係施策の中に地域づくり活動支援がありますが、相談窓口で支援を行うといっても、その地域、コミュニティに応じた地域づくりが手がけられるような支援策を行政がある程度把握していなければ、きめ細やかな支援はできないだろうと思います。
私も含め、団塊世代は、活動はしますが口も出します。現実の地域では、活動してもらうのは結構なのですが、口を出されるのは困るわけです。そこをどうするかは大きな課題だと思います。これで衝突しているところがあります。
単に地域づくりといっても、団塊世代のトレーニングだけではなく、受け入れる側の地域のトレーニングも支援していかなければいけないと思います。団塊世代だけをターゲットにして議論していては、活動を始めても定着するのは難しいのではないかと思います。その辺りについては、どのようにお考えですか。

（部長）
特に、団塊世代は男性が課題です。女性はすでに取り組んでいます。

（事務局）
大変難しい問題だと思います。トレーニング、事業の積み重ねということとの関連では、職員がＮＰＯ等の活動の現場を体験するボラターン研修を３年程実施しています。今年度は、70 人程の職員が、福祉施設やＮＰＯ法人の現場で研修しています。また、ボランタリー活動トライやる事業では、委託先のＮＰＯ法人において、50 人程度の人を集めていただき、一週間程度、ボランタリー活動を体験する機会を提供しています。
これらの事業を実施する中で気付いたことは、委員ご指摘のとおり、地域性や様々な個性を持った方がおられるということです。あるＮＰＯ法人では、参加者が、動かずに口だけで指示し、どちらが体験に来たのか分からないという感想を持ったそうです。一方、ある参加者が行ったＮＰＯ法人では、機械的にコピーなどの単純作業ばかりさせられ、ボランタリー活動を十分体験することができなかったという感想を持ったそうです。
こうした事業を通じて、双方が勉強していくことが必要だと思います。来年度は、ボランタリー活動トライやる事業を団塊世代を対象に拡充して、６ヵ所程度に広げて実施しようと思っています。

（局長）
受け入れる側のＮＰＯや社会福祉協議会に対して、受け入れ方法の研修もしていただくことを考えています。

（事務局）
施策・事業の成果については、毎年「参画と協働関連施策の年次報告」を作成していま

す。この中で、参画と協働の実施状況や主な課題・今後の取り組み方向等について記載しています。
本日の資料では、各施策の趣旨や内容は、きちんと記載していますが、全体の分量の関係から、このような課題があるので、この施策が生まれてきたという背景などは省略し、委員ご指摘のように、充分説明しきれていないところがあります。

（Ａ委員）
今のように説明していただけると我々は分かるのですが、現場の地域で取り組んでいる方が見て、分かるように配慮していただきたいと思います。分厚いものではなく、数枚で分かりやすいものがあるとよいと思います。県ではこのような事業を実施しており、県民はこのように取り組めばよいということが分かるようなものです。
例えば、地域づくり活動応援（パワーアップ）事業でも、地域のパワーアップにつながっているのかどうか、本当の協働になっているのかどうかを評価しないといけないと思います。その結果、今年度と来年度の事業は、このように違うということがあってもよいのではないかと思います。

（Ｂ委員）
県民交流広場事業は生活創造課が実施しており、まちづくり活動支援や田舎暮らし支援は都市政策課が実施しているというように、施策が個々ばらばらに実施されているように思います。それをつなぐ理念や考え方はどうなのかを常に振り返らなければいけないと思います。なかなか難しいことですが、施策間の相乗効果をどのようにあげるのかが大変重要だと思います。施策間の連携がないと、必ずしも相乗効果に結びつかないので、その辺りが今後の課題ではないかと思います。
団塊世代が注目されると団塊世代対策に移行しがちですが、コミュニティの再生やその前の人口減少社会の考え方ともつながってくるので、事業の企画立案・実施にあたっては、一連のつながりを常に振り返りながら行う必要があるということを各部局に認識してもらうことが必要だと思います。そうでなければ、県民局など現場に近づけば近づくほど、ばらばらになってしまいます。

（部会長）
平成 19 年度がこれまでと明らかに違うのは、平成の大合併があり、市町の数が大きく減ったことです。そうすると、例えば神戸県民局には、もともと神戸市しかありませんが、１つの県民局の中に２つしか市がないなど、そうした状況において、市町と県民局、あるいは市町と県との関係は、これまでと同じなのかどうか、その辺りも少し検討していただく必要があると思っています。これまで町単位で実施してきたものについて、合併により市一律に実施するのかどうかという議論もあろうかと思います。その点については何か配慮されているのでしょうか。

（部長）
大きな課題だと思います。合併により、行政は地域住民にとって遠くなる面もありますので、様々な問題が出てきています。当然、県民局のあり方についても見直しが必要であるという問題意識はあります。県民局体制が現状のままでよいのかについて、新年度から本格的に検討を開始することとしています。ただし、合併による効果が明確になるまでは

広域調整機能が必要であることから、しばらくの間は、現行の県民局体制を維持しようと考えています。したがって、数年の間には、大幅に見直すことになるのではないかと思います。

（部会長）

首長の考えがあるのでしょうが、以前の町単位であれば、それぞれが競争し、独自性を発揮しながら取り組んでいました。合併しても地域特性を生かしていくという話は聞きますが、やはり、市としての姿勢が優先され、従来のような町としての独自性はなくなってしまうのではないかという話を聞きます。そうしたことがないようにしていくのか、あるいは、あっても摩擦が少ないような形でしていくのか、地域の特性をどのように生かすかの検討が必要かなという気がします。

（部長）

合併したある市の話ですが、台風の時に、合併前であれば、電話で「溢れているのは、〇〇さん家の近くの川です」と言えばすぐ分かるのですが、職員を広域で異動していたため、応対した職員が他町から来た職員で、場所が分からず、すぐに駆けつけられないことがあったそうです。このように、規模が大きくなると、きめ細かな対応が難しいという問題があります。

（会長）

「参画と協働」は、今や時代の流れとなっています。「参画と協働」は大切であるという共通認識があり、我々は一歩先を進んでいます。そのため、予算もつき、新しいプランニングもできて、どんどん広がっています。しかし、そろそろ県として、「参画と協働」によって、何をしていくのかを考え始める時期に入りつつあると思います。「参画と協働」がこれだけ進んでくると、これが「参画と協働」であり、我々が考える「参画と協働」はこうであるということを打ち出すことが必要ではないかと思います。

例えば、先ほど部長は、市町合併によって行政が地域住民から遠くなると言いましたが、行政は住民と近いことが基本であり、それを「参画と協働」の基本哲学としているといったことです。参画と協働は、時代の流れに乗っているため、一年ごとに総括すると、大体結構な結果になると思います。しかし、反面、今は何もかもが参画と協働になってしまって、「参画と協働」が見えなくなっていないか、その辺りをこの１、２年の間に考えないといけないと思います。

もう一つは、「参画と協働」は新しい概念であり、ほとんどゼロからのスタートであったため、反省しなくても進んでいけたと思います。一方、「参画と協働」と密接な地域コミュニティは衰退しており、再生の必要性が叫ばれているわけです。婦人会なども苦労されています。つまり、いびつな現象が起きています。一方は衰退しつつ、もう一方は上手くいっている。この両者をどう位置づけるのかということも考える必要があると思います。

（Ｂ委員）

時代の流れの中で、これまでの価値観と違う価値観を売り出していかないと先が見えません。これまでは、成長することがよいこととされてきましたが、今、成長率を計算すると、衰退や縮小という言葉しか出てきません。違う価値観を見い出さないと、未来が見えないということがあります。

（会長）
２、３年も経つと、「参画と協働」は見えなくなってしまう恐れがあります。

（Ｂ委員）
「参画と協働」が出てきたもう一つ前の背景があります。そこに戻らないといけないと思います。

（会長）
兵庫県の団塊世代対策は見えにくいと思います。なぜなら、県民から質問を受ければ、この種の政策は充実しているので、どこかに当てはめることができ、一応は答えることができます。しかし、聞く側は納得していないと思います。つまり、県は、団塊世代対策として何をするのかが、一言では言えない。例えば、少し遅れているような他の自治体では、人材バンクを作りますという見えやすい政策を出します。一番ありふれた政策が人材バンクです。
しかし、兵庫県はもっと充実しているので、今さら人材バンクはないだろうということになると、それに変わるラベルがありません。政治的にも、政策的にもラベルが欲しいと思います。ある意味、多様な政策に取り組み、成熟しすぎたがゆえに「これも、あれもします」というようになり、ラベルが貼れなくなってしまっています。そろそろ深める時期に入っていると思います。

（部会長）
「参画と協働」は新しい言葉で、作られた言葉だと盛んに言ってきましたが、今、自由に使うようになり、漠然とした意味で「協働」が使われています。「協働」とは、与えられたルールのもとではなく、する人がルールを作って、イニシアティブを取ることだと盛んに言っているのですが、あまり伝わらずにそのまま流れてしまっています。最初に私が言ったのはそういうことでして、イニシアティブをきちんと与えているのかどうかをはっきりさせるべきだと思います。その辺りが消えてしまっており、お題目として、形容詞として「協働」が使われています。

（会長）
イニシアティブをきちんと取れるような組織づくりをする必要があります。今のところは、仕掛けがありませんから難しいです。

（部会長）
全般的には無理だと思うので、しやすいところから一つでもしていけばどうかと思います。全部を変えるというのは議会との関係もありますので、到底無理だと思います。少しずつでも変えていかなければ、「参画と協働」がお題目になってしまいます。

（会長）
今は、各部局が取り組んでいるものを集めていますが、何か売りになるものが欲しいと思います。

（Ａ委員）

「参画と協働」という言葉を上手く活用して取り組んでいるところはたくさんあります。しかし、課題はあるがどのように協働して取り組めばよいのかが分からないところもあります。考え方として、新しいものを打ち出す必要があると思います。ＮＰＯにしろ、地域団体にしろ、上手く活用しているところはますます展開しています。本当にそれを必要としているところには、なかなか浸透していないということを変えていかければいけないと思います。

また、団塊世代は自ら活動すると思うので、この世代に対する施策はしなくてもよいように思います。

（Ｃ委員）

この間、五木寛之さんと阿川佐和子さんが対談されている番組を見ました。人生を４つに分けるという話です。75 歳から 100 歳までを林住期といって、その時期を人生において一番楽しく充実したものにしなければならないという話です。最期にどのように死を迎えるかという心構えとともに、自分の好きなことをできる時期であるという話でした。

そこで、昨日、五木寛之さんの「林住期」という本を購入しました。詳しくはまだ読んでいないので分かりませんが、阿川さんが、「先生、１歳から 25 歳までを学生期、最期は林住期で引退ですか」と言われたら、「いや、何を言っているんだ君、今の時代は年齢より 10 歳引いて考えないといけない」と言っていました。

私も 70 歳を超えて、今後の方向性を悩んでいたのですが、それで立ち直りました。そう考えると、団塊世代というけれども、どこか違うのではないかと思っています。私たちの世代から見ると、60 歳を超えて人生の終局を迎える、仕事を離れて何か終わりを迎えるというのは、おかしいのではないかと思います。今の時代に、60 歳で定年あるいは 65 歳ぐらいまでの方が、そのようにされると、次が育っていないため、大げさな話ですが社会も崩壊してしまうのではないかと思っています。五木寛之さんの話を聞いて、私も納得させられました。60 歳の方というのは、本当に必要な人材だと思います。報酬やお金のことは抜きにして、社会を支える中心でなければいけないと思います。団塊の世代といいますが、私からすると、引退するにはまだ早いのではないかと思います。

（Ｄ委員）

Ｃ委員と同じ意見です。体力・気力・能力は、時代をいつにするかは別にして、今の人の年齢は、昔の人の年齢と比べて８掛けであると考えています。例えば、60 歳であれば 50 歳足らずだと思っています。私は現在 67 歳ですが、過去に見た 67 歳の人に比べると若いのではないかという気がしています。充分パソコンを使いこなせて、シニアの意見を収集し発信したりもしています。

私自身は団塊世代より少し上ですが、現役から退いた時に初めて自分の存在が明らかになるという気がします。会社を辞めて家に帰った時に、知っている人が地域にまったくいないことを実感させられます。組織にいて、肩書だけで活動していました。地域に戻って何が大事かというと、地域づくりどうこうよりも、地域のどこかに参加することではないかと思います。そのためには、ソフトランディングの手助けが必要ではないでしょうか。

（会長）

Ｃ委員の意見のように、兵庫県が団塊世代は地域社会を支える中心であると位置づけた

とすると、この資料４は変わります。資料４は、団塊世代を中心とした論理ではありません。年をとって老いていく人を支えるというプランニングです。兵庫県では、団塊世代を地域社会を支える中心として位置づけているから、このような責務を要求するし、そのために様々な施策をすると、はっきり言えば大幅に変わります。皆元気になるのではないですか。一見して、これは団塊世代が中心の位置づけではありません。ですから、何かシンボル的なものがあればよいと思います。

（Ｄ委員）
団塊世代には、体力、気力、能力がまだまだあります。

（Ｃ委員）
なかなか理想どおりにはいかないという現状もあります。本日、婦人会の役員会がありました。ある地域の婦人会では、私たちくらいの年齢から 60 歳後半の方が中心になって運営していましたが、もっと若い人を取り込んで、元気で活発な新しい婦人会にしなければいけないということで、古い人を抜きにして、新規募集をし、新しいことをしようとしました。しかし、結局、目標としていた人数が集まらず、つぶれました。さらに、もともと頑張っていた人が、辞めないといけなくなってしまいました。若い人が加わり、皆で支えていこうとした婦人会ですが、皆引いてしまったんです。
これまで、60 歳半ばから 70 歳の人で支えていたわけです。それをもっと若くて、活発に活動できそうな人に変わってもらおうと言った途端に、年配の人は辞めてしまい、若い人も入らずに、つぶれてしまいました。なぜ、私に相談してくれないのかと言いましたが、本人たちはやる気十分、若い人を取り込んで活動しようとしていました。このように、理想どおりにはいかないと思います。

（局長）
団塊世代に対してサービスを提供するという書き方ですが、本来の意味としては、逆に検証で明らかになったように地域の担い手が欲しいのです。県からすれば、団塊世代には新しい担い手になってもらい、担い手を増やしたいのです。しかし、そのような思いを持ちながらも、直接的な表現を避けて、資料には、受け手にサービスを提供しているという書き方にしたため、若干弱い感じになっています。
もう一つは、様々な団塊世代の方や団塊世代を受け入れる側の方と話をしたところ、シニア講座などは民間でもよく実施しているのですが、我々が思っているほど集まらないらしいのです。我々は団塊世代の方は当然来てくれるだろうと思っていますが、それほど甘くはありません。以前、経営者協会や連合の方と話したのですが、それらの方と一緒に話を持っていかなければなかなかうまくいきません。次の第２ステージだから当然来てくれると思っていたのですが、先ほどＣ委員が言われたように、世間が騒いでいるほど団塊世代は、理由は分かりませんが、思いがあって地域に入ってくるというわけではありません。
また、我々は団塊世代対策をシンボリックに捉えています。言い方は悪いのですが、これをよいきっかけとして、会社人間的な方を団塊世代という言葉で誘導して、地域に戻っていただきたいと思っています。きっかけづくりのための体験機会の提供は、果たしてどれぐらい集まるのか、疑問はありますが、そこをいかに拡げていくかが一つの大きな課題だと思います。

（Ｃ委員）
先日の婦人会の幹部会で、高砂市が実施している婦人大学に３回通ったという方がいました。その方は 62～63 歳ですが、婦人大学には 60 歳前後が通っています。卒業生は 14 人しかいません。
一方で、高齢者大学は 100 人以上です。大学には、80 歳代は行きませんので、60 歳半ばから 70 歳全般です。頑張って活動すると思われているそれらの人が、意外に、まだ現役で働きに出たり、自分の孫の子守りなどをして、お嫁さんや娘さんが働く手助けをしています。

（Ａ委員）
昨年の国民生活白書によると、60 歳代の方の約 65%が社会に貢献したいと考えていますが、そのうち、現実に地域活動に取り組んでいる方は 25%程度であり、40%程度は活動していません。おそらく、それらの方をターゲットにすると人が集まってくれると思います。しかし、団塊世代に対しては、地域づくり活動という漠然としたものではなく、もっとピンポイントにしないといけないと思います。

（部長）
県では、地域安全まちづくり活動を支援していますが、地域にとって切実な課題について活動しているところは、かなり無理な日程で研修会を開催しても人が集まります。ですから、魅力的な活動や、地域に切実な活動を展開していけば、人は参加するのではないかと思います。やはり、一般論で行ってもなかなか難しいのではないかと思います。

（Ｅ委員）
この世代は、こういうものだとあまり決めつけない方がよいと思います。団塊世代に質的な特色はなく、単に量的なものだけであるという気がします。ですから、団塊世代をシンボリックに使うのは結構ですが、その世代に対してこういうことをすればよいということはないと割り切った方がよいように思います。したがって、行きたい時に行ける受け皿を用意しておけば、今の段階ではよいと思います。
団塊世代をターゲットにした方がよいのか、そうではなく、地域の方を団塊世代に合わせるのか。彼らが望んでいる地域や地域づくりがどのようなものかを考えることも必要です。地域コミュニティの再生について、単に古いものを元に戻すというより、新しいものをどう作るかという発想が必要だと思います。団塊世代も変わる必要があるけれども、地域の方も変わり、団塊世代に合わせることを考えないといけないと思います。

（Ｃ委員）
地域の高齢者がいかに元気で頑張っているかを知っていると、そんなことは簡単には口に出せません。場合によっては、しばらくの間は、団塊世代は引いてしまうことになるかもしれません。

（Ｅ委員）
団塊世代が引いてしまうのであれば、それに合わせた対応が必要ではないでしょうか。

（事務局）
しかし、それを行政が地域に対してどうこうすることはできないと思います。

（Ｅ委員）
できないならば、団塊世代への地域づくり活動の支援は意味が薄れてしまいます。つまり、地域と団塊世代についてどちらを変数として考えるか、それとも両方なのかが気になりました。
この部会で、地域コミュニティの再生に関する議論をする時に、参画と協働の観点から、このテーマをどう受け止めるかは以前から気になっていました。県行政への参画の方は、常にしているので、ここではもうよいかと思います。他方、協働の方で、協働の問題と地域コミュニティがどのように関わっていくのかが気になっています。というのは、協働の話をする時は、地域以外のもっと多様な活動主体の話があったはずです。そういう意味では、地域というフィールドで、多様な主体が地域コミュニティとどう関わり合えるのかを少しこの部会で議論しないといけないと思います。
もう一つは、総合政策部会でも出てきていることですが、市町と県の役割分担と連携です。逆に言うと、県がどこまでするのかということは悩ましい問題だと思います。私も答えが見つかりませんが、その辺りは気にしておく必要があります。

（Ｃ委員）
小地域の場合は、団塊世代やもう少し上の世代が退職し、改選期になれば待っていたように自治会の役員が回ってきます。そして、若い人が活発に活動できるように様々な改革もできます。しかし、連合体になり、大きくなればなるほど、依然として高齢者が上にいます。小地域ではできても、大きな地域では、団塊世代が入ってきたからといって、急に行政が思うような形にしようと考えても難しいと思います。例えば、地域安全まちづくりや暴力団追放の活動をする防犯協会は男性が中心の会です。それでもなかなか出席していません。しっかりした組織があっても、実働部隊が少ないと思います。
小地域では、団塊世代の人が入れば改革できると思います。婦人会では、定年されたばかりの方が、大変活発に活動してくれています。しかし、それが校区へ出て、連合へ出ていった場合には、70 歳後半や 80 歳くらいの方がいますので、難しいと思います。それは婦人会だけではありません、連合自治会の役員を見ても、70 歳後半から 80 歳くらいの人です。それを行政がてこ入れするわけにはいかないですし、定年にしてくださいというのは、なかなか難しいと思います。だから、小地域から変えていくということを書いていくしか仕方がないと思います。

（Ｄ委員）
なぜ団塊世代が地域づくり活動に参加するかというと、地域を活性化したり、地域をよくするには時間が必要ですが、現役世代はそのための時間をとるのが難しく、大量に地域デビューする団塊世代は、全体的な時間が確保できるためだと考えています。自由な時間を地域の活性化やコミュニティ再生に使っていただく。だから、時間を確保しやすい団塊世代を一つのターゲットにしていると思っています。
私の理論の根底は、団塊世代が地域デビューするという場合、それは男性の課題だと思っています。女性の場合は、普段からある程度仕事を持っていても近所付き合いなどがあります。男性の場合は、大量に時間確保ができる。それが団塊世代の地域づくり活動を考

える基本だと理解しています。

（部会長）
　地域によってかなり違うようです。例えば、ニュータウンといわれているような地域では､そういう人たちが中心になって活動し始めて成功しているところはあります｡しかし、従来型の地域では、あまり上手くいっていません。どのように融合できるかは分かりませんが、とりあえずニュータウンなどでは、かなり盛んにしているところはあります。

（Ｄ委員）
　確かに、古い地域では、かなり年配の方が会長をされています。しかし、私の友人は神陵台で自治会長をしていますが、ニュータウンでは比較的、私たちくらいの人が中心になっています。

（Ｂ委員）
　大事なのは、今そうであるだけであり、全体の流れを考えると、極端に動いているところもあるし、緩やかに動いているところもあるのだと思います。

（Ｃ委員）
　今すぐには絵は描けないと思います。将来的にはそのような形になっていきますが、団塊世代もいつまでも 60 歳前後でいるわけではありません。

（Ｂ委員）
　生活創造大学の修了式で講演を頼まれた時に、皆さんの地域には古いしっかりとした自治会があり、なかなかそこに入っていけないということがありますが、無理をして入っていただく必要はないと言いました。自分たちの仲間を集めて、自分たちの活動を地域でしてください、そのうち地域で必要とされるのであれば、地域も変わっていくだろうし、それを待てばよいという話をしました。無理矢理入るよりは自由に活動した方がよいと思います。

（Ｃ委員）
　そういう視点は、問題があると思います。

（Ｂ委員）
　地域には多くの様々な活動が必要です。時間はかかるかもしれませんが、お互いに認め合い、助け合っていけるようになればよいと思います。

（Ｃ委員）
　しかし、小さな組織や点の活動が多くあっても、それが線にならないといけないと思います。自分たちだけで自己満足するのではなく、大きな成果を出そう思えば、点が線にならなければいけません。ですから、いつまでも、自分たちの好きなことばかりしていてはいけないと思います。ＮＰＯも、きちんと点が線になるような形で活動していかなければいけないと思います。

（Ｂ委員）
お互いにつながる必要が出てきた時につながればよいのであって、最初から無理につなげる必要はないと思います。

（部会長）
昨年、兵庫県で実施された「のじぎく兵庫国体・大会」では、新しい団体や従来からの団体など様々な団体や組織が関わったと思います。そういうものが体験として残っていかないのですか。

（部長）
新規施策には、国体のボランティアを次の活動につなげていくための取り組みがあります。

（部会長）
国体の経験が、どのようにすれば残っていくのかなと思います。

（Ｃ委員）
「ひょうご女性未来会議」では、毎回テーマを決めて全県で会議を行っていますが、人がなかなか集まりません。高砂市で集まるのは 10 人足らずです。質よりも量ではないですが、個人が 10 人だけで何ができるのかと思います。だから、そういう人たちも、自分たちだけが目立とうとせずに、女性団体のネットワークに入って、皆一緒にならないといけないと思います。地域女性団体ネットワークでは、様々な団体が集まったから、子育て支援事業ができたのです。一つ一つが点のままではいけません。

（部会長）
部長が言われたことは、資料２の６ページに記載している「のじぎくボランタリーネット」のことだと思います。具体的には、何をどのような形でするのですか。

（部長）
国体にボランティアとして参加していただいた方を逃さずに、国体のネットワークを生かし、継続してボランタリー活動への参加を呼びかけていくものです。

（部会長）
お題目を唱えるだけではなく、実際に、もう少し何を行うかを打ち出せないですか。

（部長）
直接、情報が届くようにしたいと思っています。「このような体験ができる機会があります」、あるいは「どのようなことがしたいですか」というやりとりができるようにしたいと考えています。

（部会長）
それは、国体をしなければできないのでしょうか。次の何かが必要ではないですか。

（Ｅ委員）
「のじぎくボランタリーネット」ばかりを打ち出してしまうと、すでに動いているネットワークとつなぐことが難しくなると思います。最終的には、「のじぎくボランタリーネット」はなくなってもらわないと困るわけですね。

（部長）
そのとおりです。コラボネットに吸収されることを想定しています。

（Ｅ委員）
今はまだ国体の余韻が残っていますので、消さないように支援する必要があるということですね。ただし、支援の方法をどうするかは問題です。ボランタリー活動が一般化するようにしないといけないと思います。

（部長）
ボランタリー活動を初めて経験し、よかったと思っている方が多くおられました。そういう方を逃がさないで、継続して活動に取り組んでいただきたいという思いがあります。

（部会長）
実際に何かしたいという方は多くいらっしゃいますね。

（部長）
その通りです。

（部会長）
何がしたいのかはあまり分からないのでしょうか。

（事務局）
「のじぎく兵庫国体・大会」では、約２万３千人のボランティアが参加したといわれています。分析すると、スポーツ競技に関係している団体や青少年の活動団体の方が多かったようです。また、従前から活動されている社会福祉協議会の方も多くいました。それ以外に、お祭りが好きという方も多く、それらの方が、ボランタリー活動を初めて経験された方だと思います。ですから、それらの方については、「こういうイベントがあるからいかがですか」、あるいは、あまり想定したくありませんが、「災害時に人手が欲しいので、そうした経験ができます」というように、分野別にきめ細かな情報を提供できればと考えています。

（部会長）
そういう体験を震災後にしました。皆さん様々なことをしたいと言い、気持ちはあるのですが、どうすればよいのか、何をしたらよいのかが分からないということがあります。
例えば、「お餅を配りましょう」ということになれば、いろいろな人がやります。何をしたいかという情報をもらって、双方向でできる仕組みがあればよいと思います。

（事務局）

「のじぎくボランタリーネット」は、まだ正式な名称は決まっていませんが、現在、参加者を募集しています。来年度は、フォーラムやミーティングを開催し、互いに要望やしてみたいことをきちんと聞く必要があると思っています。

（Ｃ委員）

私の団体は、昔から奉仕団体ということになっていますので、難しいことは言わず、お手伝いに行って欲しいというと、皆さん積極的に行ってくれます。神戸の人は、三木市や宝塚市などへ毎日行ってくれます。公館の案内もボランティアでしています。

（Ｆ委員）

本日、いろいろお伺いした中で、大変心に残っていることは、Ｃ委員の「年齢は 10 年引いて考える」という考え方でした。五木寛之さんのお話を紹介されていましたが、私の専門なので少し補足させていただきます。

古代インドでは、どのように人生を過ごすかについて、長い時間かけて考えられた「四住期」という考え方があります。人生を学生期、家住期、林住期、遊行期の４つに区切っており、Ｃ委員は林住期の話をされました。世俗的な現役は家住期までです。その後が林住期なのですが、林住期は地域づくり活動に当てはめると、まだまだ現役世代かもしれません。その後に、お遍路さんではないですが、どのように死を迎えるかということで、哲学的な生活を送る遊行期があります。学生期は別として、今までより 10 年引いて、それぞれの時期を考えなくてはならず、昔の 50 歳は今の 40 歳ぐらいだという考え方は必要だろうと思いました。

もう１つ心に残ったのは、もしかすると団塊世代が地域に入ると引いてしまうかもしれないというご意見です。先日、団塊世代の再就職の問題を放送している番組を見ました。それを拝見して、定年を迎える方の一番の願いは、次の仕事だと思いました。なお現役で 10 年頑張りたいという希望です。だから、仕事を辞めたからといってすぐに地域に帰ってくるかというと、そうではありません。後の 10 年の過ごし方が見つからず、何もすることがないため、周りはそのように思わなくても、少なくとも本人は仕方がないという気持ちで、入ってこられるとすれば、地域には昔から厳然と元気な方々がいますので、大変入りにくいと思います。

そこで、昔の世代交代を振り返りますと、地域にあった横のネットワークは世代ごとだったのです。お嫁さんの入る集団（観音講）があり、そこは、年を重ねれば、その人は上の念仏講に移るというシステムです。ですから、先ほど婦人会で失敗した例を話されましたが、それは昔のネットワークを研究している人間から見れば、そのような仕方は絶対に上手くいかないです。だから、どのように地域に入り込んでいくかという時に、やはり入れ物を考える時は、よほど考えないと大変であるという気がしました。あがり組織というものを考えておく必要があると思います。

先ほどの「のじぎくボランタリーネット」もあがり組織の一つです。あることが終わった時に、そのネットワークをどうしておくかを考えておく必要があります。地域ビジョン委員会でも、地域ビジョン委員会のＯＢをどうするかという同じような話がありました。しかし、どこも上手くいきませんでした。

（部会長）
地域ビジョン委員会のＯＢ、ＯＧについては、阪神南地域は上手くいっているようです。

（Ｆ委員）
現役の方と上手くネットワークできているのですか。

（Ｃ委員）
東播磨地域では、上手くいっていません。

（Ｆ委員）
阪神地域のビジョン委員会は、もともと人と人とのつながりに基づく、ネットワーク型で設置・運営されている組織ですから、現役とＯＢのネットワークもうまくいっているような気がします。そうではなく、もう少し古い西播磨地域などは、現役は邪魔をしないで欲しいと思っているのではないでしょうか。

（Ｃ委員）
先日、東播磨地域のある地区で、講師を呼んでイベントを開催した時に、「どこがこのようなことを企画したのですか」と言われたらしいです。県民局が後援したのですが、「誰に話してこのようなことをしたのですか」と言われたらしいです。「あなたは誰ですか」と聞くと、「私は東播磨の地域ビジョン委員です」と言っていたそうで、「地域ビジョン委員はそんなに偉いのですか」と私に聞いてきました。このようにあまり上手くいっていません。

（Ｆ委員）
その辺りの調整をしないと、なかなか上手くいかないと思いました。そういう意味で、冒頭で部会長が話された「ルールづくりから一緒にするのが協働」であるという、つまり、もう一度地域づくりの新しいルールを作るという機運を醸成していかなければいけないと思いました。
また、「団塊世代をどうするのか、あるいは、地域が団塊世代をどう受け入れるのか、どちらに力点を置くのかが問題である」というＥ委員の意見は大変重みがあると感じました。結論から言えば、団塊世代をどのように受け入れるかという地域のあり方を、ルールづくりも含めて、これからきちんと考えていかなければならないという印象を持ちました。

（部会長）
地域コミュニティの「地域」は、「場」の話です。「コミュニティ」は、クラブコミュニティというものがありますので、「組織」の話と考えれば、地域コミュニティという「場」と「組織」を一緒に議論してしまって、一つにまとまるのかという気がします。特に、今の時代を考えると、リージョナルなもの（即地的な地域）だけをベースにしてしか、ものが言えないのはどうかと思います。
これまで別の地域で生活されていた人が多くいます。それらの人に対して、「地域だけをベースに活動してください」というのは非常に限定的であり、それらの人の能力を充分発揮できないのではないかと思います。それらの人が十分に能力を発揮できるように、地域に関係しない形でつないで、何かしてもらうことも必要ではないかと思います。
10 歳くらいの子どもであれば画一的に考えられても、60 歳、70 歳になると多様になる

ため、亀裂が生じる可能性があります。ですから、それぞれの意向に沿った形で、活動できないものかと思います。

（会長）

今、言われたことも含めて、展開方針（案）の冒頭に基本的な姿勢を記載できないでしょうか。記載すればもう少し伝わるかもしれません。上手くいっているところとそうでないところがあるのは当然だと思いますので、効果はそれほど急がなくてもよいと思います。

大きな流れとして、参画と協働には勢いがあります。しかし、勢いには乗っていますが、油断してはいけないというある種の反省の時期に入っていると思います。では、具体的に県はどのような施策をすればよいかというと、コミュニケーションのプロセスの中から出てくることを大切にするという、部会長が話されたようなことだと思います。コミュニティは、必ずしも地域性にこだわらない側面もあり、その点もきちんと視野に入れる必要があるなどという県としての基本姿勢が欲しいと思います。

参画協働課は、企画調整のようなところがあります。企画調整の役割として、皆の意見を聞かなければいけませんが、意見を聞きながら少し厚かましく誘導していくようなことができればよいと思います。

また、団塊世代については、このカードを使わない手はないと思っています。ここ 20 年、30 年を見てきた時に、様々な状況に合わせて手を打ってきたわけです。この 60 歳前後の方を現役と見て、手を打つことは前例がなかったわけです。局長が言われたように、これはシンボルであって、このカードを打てば動けるわけです。この点はＥ委員とは違うところです。

（Ｅ委員）

私は世代論をここでしても仕方がないという意見です。

（会長）

これは必ずしも世代論ではありません。

（Ｅ委員）

量的に大きな団塊世代をターゲットにすることはあり得ると思います。ただし、このターゲットにどのような施策を打っていくかというところで、団塊世代の特色を切り出したアプローチにするのか、そうではなく団塊世代は多様で自己主張が強い世代であることを念頭に置いたアプローチにするのかは、議論があると思います。

（会長）

確かにそういう側面はあります。ただし、県としてはこのカードを無視するわけにはいかないと思います。

（部会長）

Ｃ委員やＦ委員が話された、人生を４つに分けて考えるというのは、平均寿命がいくつぐらいを前提にしているのですか。100 歳を前提にして、４つに分けて 25 歳ごとということもあるのでしょうが、シェイクスピアは生涯を８つに分けています。それがたまたま、60 歳前後はここに入るからと割り切ってよいのかと思います。その辺りが私の知識とギャ

ップがあります。

（Ｆ委員）
何年とは決まっていません。

（会長）
日本の場合は婚姻です。結婚が遅れるとそれに従って各々の時期が遅くなっていきます。つまり、基本的には家の論理です。ですから、団塊世代の問題は家の論理で解釈できるかもしれません。

（Ｃ委員）
私の主人は 10 年程前に亡くなりましたが、54 歳くらいから会社の役員になり、64 歳まで会社に勤めていました。64 歳まで働いていたので、後はゆっくりすればよいのではないかということで、天気が良くても悪くてもずっと本を読む生活を送っていました。そこで私は、「晴耕雨読と言うけれど、あなたの場合は晴読雨読です。そのようなことをしていると体に悪い。そんな姿は見ていられない。お金はいらないので妹の主人の会社へ働きに行きなさい。」と言いまして、妹の主人の会社へ働きに行きました。その後４年間、お金を度外視して、生き生きと働いていました。その会社は四国にあるのですが、月の３分の２はそちらへ行っていました。後には、会社を大きくして高給を得ましたが、生まれ変わったように働いていました。やはり男の人は働かないといけないと思いました。
ですから、団塊世代で 60 歳を超えたからといって、退職して他のことをする人は少ないのではないかと思います。

（部会長）
制度的に 60 歳以上の定年が８割から９割と言われていますが、定年が徐々に 65 歳になっていく中で、60 歳そこそこというのは意味があります。
65 歳の方にお聞きすると、70 歳まで働きたいとは言わずに、あと２、３年働きたいと言われます。そして、２年経ってまた聞くと、またあと２、３年働きたいと言われます。そのように皆さん堅実で、自分の体力を謙虚に考えて、何かしたいと考えています。働くことは、賃金を受け取るためではなく、社会参加の一環として働きたいという方が多いようです。
65 歳で雇われて働く人の比率が、５割を超えているのは日本ぐらいです。アメリカでは、60 歳から 63 歳くらいまでの働く人の比率は３割から５割ですが、65 歳を超えると大幅に減ってしまいます。それは、社会制度がそのようになっているからであり、日本もそうなる可能性がないわけではないのです。しかし、とりあえずは今の制度のもとで、それぐらいの年齢の人たちが何か元気にしていけるような環境を考えようという話だと思います。

（会長）
大正、昭和の頃の農村では、「稼ぎ」と「仕事」は分けて考えていました。都会の人たちは、稼ぎと仕事の区別がなくなっていますが、仕事というのは何もお金が入らなくてよいわけです。村の中でしなければならない仕事があり、それとは別に子どもの養育費が必要なので稼ぐというようにきちんと分けていました。仕事が大事だという考え方は、田舎の方では結構生きていると思います。

（部会長）
田舎ではその人が何をしているのか、その人がどういう人かは分かりますが、都会では分かりにくいと思います。そうすると、仕事でどれだけというよりも、稼ぎがどれだけであるか、学歴や会社がどうであるかなど、外形的に判断できるものを尺度にしてしまうことになります。だから、もっと様々なことで知り合えば、そういう外形的なものを尺度にしなくてすむと思います。そこまでいけるかどうかです。

（会長）
いけるかどうかではなく、県はこうすべきだと言い切ってしまわないといけません。それで衝突すれば、また議論すればよいのです。

（Ａ委員）
次の世代にどう引き継がれるのかは大きな課題だと思います。

（Ｂ委員）
今のトレンドがこのままいけばよいとは思います。但馬に行った時のことですが、これからの地域をどうしていくかという話をしたとき、今ある様々な団体や組織がピラミッドのようにあって、議論しても前向きの議論が全く出てこないという話がありました。やはり、地域で様々な活動を自由にできる環境をつくり、困った時にそういう人たちと連携していけるような種まきは、しておかなければならないと思います。

（Ｇ委員）
展開方針（案）について、様々な意見が出ていますが、事業計画を考える上で、基本柱が必要だと思います。それに重点施策が位置づけられるものと思います。重点施策を見ると、各部局単位で施策が並んでいるだけで、基本柱が見えてきません。
団塊世代対策については、年齢構成上 58、59 歳の方が非常に多くなっています。政府もこれは大変だということで、定年制を廃止する、あるいは、65 歳まで定年を延長するというように制度を変えようとしています。ですから、企業の方では基本的には 65 歳までの定年延長が整備されつつあります。そういう意味で考えると、逆に、60 歳で退職する方は、先進的な考えを持った方で、次のライフステージとして何かを考えている方だと思います。そうではなく、65 歳まで働き続けた方、いわゆる企業人間と呼ばれる方が、いざ 65 歳で退職を迎えた時にどうするのかということで、60 歳よりも、むしろ 65 歳の時点の方が問題なのかと思います。
Ｃ委員が話されたように、そのような方を受け入れる小さな一つ一つの地域の集まりであるコミュニティが大事になってくると思います。ただし、それだけであると、どうしても外に情報発信する際に限界があります。そこで、そういう小さな集まりをネットワーク化して、スケールメリットによって、兵庫県では、こういうことを活発に行っている、地域ではこういうことに取り組んでいるということを外向けに情報発信していくことが必要だと思います。このように、うまく情報発信するには、一つ一つの小さな地域ごとよりも、スケールメリットを生かしたネットワークが大切になってくるのではないかと思います。

（部会長）

どうもありがとうございました。予定の時間がまいりましたので、この辺りで意見交換を一応終えさせていただきます。

本日、初めて資料をご覧になる方がほとんどだと思いますので、ゆっくり時間をかけて見ていただき、ご意見を事務局までお寄せいただきたいと思います。

今日いただいた皆さんからのご意見を聞いて、何かキャッチフレーズを考えた方がよいと思いました。木の幹や、パラソルの柱みたいなものがあって、その下に様々な施策がぶら下がっているような構成の方が理解しやすいと思います。何よりも、こうしたものを作るのが目的ではなく、これを読んでいただいて充分理解していただくことが大切です。我々のように多少知っているものだけではなく、関心をお持ちの一般県民の方にも、読んでいただいて分かるような工夫をお願いしたいと思います。

それでは、進行役を事務局にお返しします。

（事務局）

どうもありがとうございました。

本日のフリーディスカッションをお聞きして、随分たくさんのヒントあるいは宿題をいただきました。

来年度は、総合政策部会とも充分話し合いながら、答申に向けてあるいは参画と協働のさらなる推進に向けて、ご議論いただきたいと思います。

最後に、部長から閉会のご挨拶を申し上げます。

（部長）

本日は熱心なご討議ありがとうございました。

先ほど事務局から申し上げましたように、総合政策部会とよく連携をとって、答申がうまくまとまるよう努力したいと思っています。

団塊世代の方がＮＰＯや団体に行かれた時の話ですが、受け入れた側の方が、「雑巾がけをすることを知らないのではないか」と話していました。要するに、そこで雑巾がけをして初めて人間関係や信頼関係が生まれるということです。さらに、「雑巾がけをして、はじめて組織の中で一目を置かれるようになるのに、来るなり指示をするとはもってのほかである。人生作法が分かっていない」という話も聞きました。人生作法のトレーニングをしておかないと、例えば婦人会に若い女性が行っても、とても受け入れてもらえないでしょう。基本的な人付き合いが断絶しているという印象を持ちました。それは子どもも同じだそうですが、世代をつなぐことが必要だと思いました。

今後とも一層のご指導をよろしくお願いいたします。

（事務局）

来年度については、改めてご案内させていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして、第３回参画・協働推進部会を閉会とさせていただきます。

Ⅵ　閉会